

後日聞いた話だが、予め連絡を取らずに現地に行くことと仕事が無いそうである。おそらく現地の人たちも復興作業に追われて、こちらの指示を行う余裕がないのだろう。このような場合、仕事を役所などに一方的に求めるとかえって負担となってしまうため、自分達で行うべき仕事を探すことが重要であることがよくわかる。住民の人たちに話しを聞けば、役所単位では把握できない仕事は必ずあるだろう。

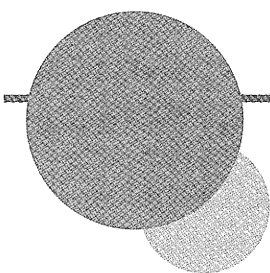
また次に、ボランティア活動へ参加するきっかけについて次のように考えた。これまで私はあまりボランティアをいうものに積極的に参加しなかった。今回参加した理由としては、同じ新潟県内の出来事であったということが挙げられる。これが全く異なる地域、遠方の地域であればおそらく参加していなかっただろう。その根底には「地域同士の助け合い」、「困ったときはお互い様」といった意識が自分の中にあったように思え、ボランティアという活動を行ううえで、これらの意識は重要なのではないかと考えた。

なぜなら、人は身近な人、親しい人のためであるほど、無償で行動を起こす傾向が高いからだ。このような意識が地域社会の人々に育っているのなら、災害が起きた時に皆がより迅速に、自発的に活動に

移すことができるのではないだろうか。そのため、個人間の地域社会内の繋がりをどのように強めてゆくかが課題であると思う。大学はそうした意識を育てやすい機関であると思う。研究やフィールドワーク、その他様々な活動を通して、地域の活性化を促す役割をもっている。特に我々農学部は農業という1つの産業を対象とした学問であるから、地域との結びつき、協力関係は強いと言えるだろう。調査や研究の協力をしてもらうため、大学は何かしら地域社会へ貢献することが必要だと思う。ボランティア活動もその一環ではないかと感じた。

今回参加した水害ボランティア後、悪いことは重なるものなのか、10月23日に中越地方は中越地震に見舞われた。死傷者は少なかったが、水害の影響によって不自然な生活を送る被災地の方々には、更に大きなストレスとなったことだろう。水害と地震によって被害を受けた被災地の方々が、一刻も早く普通の生活に戻り安心して暮らせるようになるようお願いしている。

私は地震後のボランティア活動には残念ながら参加することはできなかったが、今後県内はもちろん県外も含め、ボランティア活動に積極的に参加しようと思う。



小国町ボランティア

農業生産科学科3年 渡辺千香

11月4日・5日にかけて小国町へボランティアに行った。「どのような活動が行えるか」ということを把握することが、大きな目的であった。これをもとにして、農学部位全体がどのような支援を行えるか計画するらしい。メンバーは伊藤先生と私を含めて8人と、少人数であった。

11月4日：第1日目

早朝に、新潟大学農学部を出発する。高速で長岡へ向かったが、途中で通行止めになっていたため、高速を降りた。長岡に行くと、道路が波打っていて、痛んでいるのがわかった。小国町到着後、役所のボランティアセンターへ行った。しかし仕事は無く、車内で待機することとなった。そこで、先生の知り合いである小嶋さんの事務所へお邪魔をして話を伺

うことになった。そこでは以下のような内容であった。

・建物にはられる赤紙・黄色紙・青紙について

赤紙が張られてしまうと、「危険だ」という意識が強くて、入れるのに入れなだとか、仮設住宅に入るといった考えを与える。どれくらい傾いたら赤紙が張られるのか、住めないと判断される基準の明快化が必要である。

・ボランティアセンターについて

本当に現地からの声が届いているのかは疑問である。特にお年寄りや、自分から「～してほしい」などの要望をださないで、どのように声を拾っていくのが課題である。

・仕事について

被災地では、被災者に多くの支援が行われている。そのために、被災者の仕事がなくなったり、観光産業が衰退したりするといったことが起こっている。被災地にもある程度の仕事を与えることが必要である。

・犯罪

震災が起ると物騒になるといわれている。実際「頭金を今払ってもらえれば、優先的にあなたの家をなおします」といってお金を騙し取るといったことが発生したという。

以上のようなお話を伺った後、小嶋さんの配慮で、公園に発生した亀裂部分の上にビニールシートを張る仕事を行った。その後、町内を案内していただいた。道路の幹線部分は優先的に修復されているが、裏道はまだそのままであった。

暗くなり、帰るか泊まるか選択することとなった。宿泊施設の確保もボランティア自身で行わなければならない。小嶋さんの事務所に泊まるという話もあったが、迷惑をかけられると思われた。帰る時間があるのなら帰ったほうが賢明であると思った。その日はメンバーの二人を残して新潟に帰った。

11月5日：2日目

前日と同じように小国町へむかった。高速道路は長岡まで開通しており、前日より早く着いた。まず、ボランティアセンターに行ったが、同じく仕事は無いといわれた。そこで、前日と同様に小嶋さんの事務所へ行った。私たちは小国町でもさらに山奥の集落へ行くことになった。そこは紅葉がとても美しい里であった。

その集落の方々は、会館に非難していた。その

うちの一軒の方が、仮設住宅へ移る準備をしておられ、私たちは筆筒を運び出すのを手伝うことになった。その方の家は、赤紙が張られており、中にはいると、家全体が揺れている感じがした。「土足で入っている」といわれたので、その言葉に従った。筆筒を倉庫に移し終わると、もう昼近かったので、会館で住民の方と一緒に昼ごはんを食べた。お湯をもらったり、貴重なコーヒーを勧められたりと、気を使っていたが、申し訳なかった。午後になると、公民館の片付けをすることになった。公民館もまた、赤紙がはってあった。中は壁も蛍光灯もおちていた。続いて国際交流会館に向かい、公民館と同様に清掃を行った。しかし、全部終わらないうちに帰らなければならない時間となってしまった。国際交流会館の清掃は、次の日に別のボランティアの方が引き継いでくれるそうだ。新潟大学に着いたのは夕方6時ぐらいだったと思う。

気づいたこと

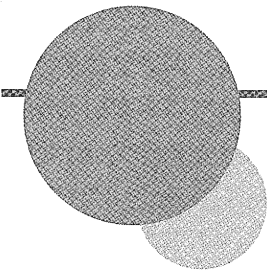
- ・今回は一般家庭に入って片付けを行った。小嶋さんに言われたことだが、どこの誰ともわからないボランティアを家に入れることは、盗難やプライバシーの問題といったリスクを伴う。だから、身元のはっきりした学生を先生が引率して派遣するといったことも必要である。
- ・ボランティアがくると世話役が必要となるので、どうしても地元の方が必要になってしまう。また、片付けを行うときも逐一指示を仰ぐ必要がある。
- ・ボランティアが来たとしても、ボランティアの使い方をわかっている方はほとんどいない。被災者の要望を聞き、ボランティアを派遣する架け橋が必要になるが、この架け橋の機能もきちんと果たされているかわからない。
- ・今回、無理やりでも仕事をしたことで、ボランティアの使い方がわかった住民もいるかと思う。
- ・短期的な援助をするよりも、冬の雪かきなどの、今後必要になりうる長期的な支援体制を作るべきである。
- ・何の技術も専門知識もない人が被災地でできることは、炊き出しや力仕事などで、限られていると思った。建設や土木関係・人材派遣や物流システムの専門知識・医療・看護・カウンセリングといった分野に精通した人が本当に必要だと思った。

ボランティアとはなにかについて

打ち上げのときに、ボランティアの意味についていろいろと考えさせられたが、今でもよく分からない。昔はボランティアの意識がなく助け合っていたが、最近ではあらゆるものが現金化されている。タダ働きにとってかわる「良いイメージを与える言葉」が必要となったのではないか。ボランティアは輸入した言葉である。善意のタダ働きを意識化するため

にあてがわれた言葉ではないだろうかと思った。

自己満足とか、大きなお世話といった批判もあるかもしれないが、ボランティアを行う時は、「何かをしてあげる」という精神ではなく、被災者は何をしてほしいのか、何を思っているのかを尊重して活動することが必要だと感じた。そうすれば、必ず伝わる時があるのではないかと思った。



水害ボランティア

農業生産科学科3年 長 智恵美

昨年の7月上旬、それまで体験したこともないような大雨が降り続けました。私達が住んでいる辺りは海沿いで被害もなかったのですが、いつも通り生活を送っていました。しかし、家族や親戚、友人のメールやニュースを見て、中越で水害が起こっていることを知りました。

その後、ニュースでの報道や農学部の方による報告がありました。中山間地域の土砂崩れ、浸水した家々や事業所、商売に不安を抱える人々、汗流して作ってきた農作物が浸水し、収穫が絶望的となっている状況など、どれも見ていて痛々しいものばかりでした。そのときは試験と重なっていたため、募金活動に協力することぐらいしか、積極的に働くことはできませんでしたが、試験が終わった後で何か自分にできることがあればひやりたいと思っていました。

私達が水害ボランティアとして泥上げ作業に向かった8月上旬は、都市部がそれまでの生活をようやく取り戻し、緊急に設置されたボランティア対策本部も閉鎖するなど落ち着いてきたようにみられた時期でした。しかし、中山間地域など、あまり人の多くない地域はまだ様々な問題を抱えていました。

床下浸水による建物の中の片付けや土砂崩れの恐れはとりあえず落ち着いているように感じられましたが、農業用水路が泥でふさがって思うように水を与えることができずに困っていること、水害を受けた田畑が翌年も機能するかどうかという心配、土砂崩れにより崩壊した建物の処理の問題などです。

私たちはその日、被害にあった建物を見て、その時のすさまじさを想像すると胸がとても痛くなりました。なかには死傷者のあったお宅もあったそうです。幸い土砂災害から免れることができた家々も、水害の時に増水した泥水の水位の後がくっきり残っていました。

また、生活の場だけでなく、一部崩れかけていたり、隣とイネの生育が明らかに違ったりする田んぼなど、農業の現場にも水害の爪痕がまだ残っていました。農家の方が、収量や品質の心配や来年の作付けの心配などで肩を落としておられるのも本当によく分かりましたし、気の毒でしかたがありませんでした。

農業用水路の泥上げについては、想像していた以上に泥がたまっていて、水の流れが極めて少なく、ほとんど水路としての機能が果たされていない状態